



Title	「てくる」の理解における語彙と文法知識の影響 : 中国語を母語とする日本語学習者の場合
Author(s)	周, 利
Citation	間谷論集. 2023, 17, p. 69-89
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/91365
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

〈研究論文〉

「てくる」の理解における語彙と文法知識の影響

——中国語を母語とする日本語学習者の場合——

周 利

〈キーワード〉 「てくる」 語彙知識 文法知識 相関関係 分散分析

1. はじめに

日本語は出来事の空間的方向や時間的な捉え方を話し手の視点の位置との関係において表す傾向の強い言語である。「てくる」はこうした関係を表す上で重要な役割を果たしている（山本 2001b, 2007, 堀江 2009, 2010 など）。「彼がこちらに走る」より、「彼がこちらに走ってくる」という表現の方が、具体性が加わり、状況が分かりやすくなる。山本（2007）は「てくる」を〈主観性〉¹の指標として指摘している。〈主観性〉の指標は〈共同注意〉²の契機となる。「てくる」は、話し手が聞き手に状況を説明したり、勧誘したり、報告したりといった発話で用いられるものが多く、聞き手に働きかけをするような発話行為と結びつきやすいという傾向がある（山本 2007）。「てくる」の実際の会話の使用実態について、堀江（2010）では日本語の話しことばにおける補助動詞の使用実態を分析し、「移動・方向性」を表す補助動詞「てくる」の使用頻度が最も高く、会話においては用いられやすいと報告している。同様に、中俣（2015）では、動詞に接続する初級文法項目 103 項目を生産性の観点から、「てくる」を「出現頻度が高く、生産性が中程度の文法項目」と分類している。吉成・真野・江口・松本（2021）が日本語・英語・ハンガリー語の母語話者の移動事象における言語表現を分析し、比較した結果、日本語は英語とハンガリー語と異なり、ダイクシスとしての「ていく」「てくる」で表示するのが特徴であると指摘している。このよ

うに、「てくる」は話し手の視点に関わっており、多様な意味・機能があり、日本語母語話者の日常会話に頻繁に使用され、自然な日本語の表現の重要な一部分であると言っても過言ではない。その一方で、「てくる」は初級で導入される文法項目にも関わらず、中・上級レベルに達している日本語学習者でさえ、移動の方向性の混同、脱落などの誤用が頻繁に行われると多く指摘されている（市川1997, 張2001, 菅谷2002, 許・小川2016など）。そこで、本研究では、2022年5～6月に中国の2つの大学で実施した「てくる」テスト及び学習者の日本語能力を測定する語彙テストと文法テストを用い、次の2点について検討する。第1に、中国語を母語とする日本語学習者を対象に、「てくる」の空間移動用法、逆行態用法、アスペクト用法における理解の違いを明らかにする。第2に、語彙知識と文法知識が「てくる」の空間移動用法、逆行態用法、アスペクト用法の理解にどのような影響があるかを検討する。

2. 先行研究の概観と本研究における「てくる」の分類枠

2-1. 「てくる」の用法分類及び日中対照研究

「てくる」の用法分類について、森田（1968）、吉川（1976）、今仁（1990）、坂原（2012）などは「てくる」を大きく主体の空間的な移動を表す用法とアスペクトの意味を表す用法に分けている。それに加えて、住田（2005, 2011）³、古賀（2008）、清水（2010）などは、「ハナコが手紙を書いてきた」に見られるような話者に向けられた行為などを表す「てくる」の逆行態標識としての用法があるとし、ヴォイスに関連する機能を有していると述べている。一般的に、「一人称>二人称>三人称」という人称階層が言語普遍的傾向として認められている。高位の人称から低位の人称に行為が行われる場合は「順行態」で、動詞の基本形を使う。それに対し、低位の人称から高位の人称に行為が行われる場合は「逆行態」で、「逆行態」の標識としての「てくる」を付けるのが必須である。

「てくる」の日中対照研究は、張（2001, 2013）、陳（2017）、周（2019）などがある。張（2001, 2013）は日本語と中国語の違いから日本語の「てくる」と中国語の「V来」の対応関係を分析している。張（2001, 2013）は日本語の「てくる」を具体的な移動と抽象的な移動に分けている。その中で、具体的な移動とし

での「継起移動」をさらに中国語の「V 来」と対応している「一方的継起移動」と中国語の「V 去」と対応している「往復的継起移動」に分けている。また、張（2001, 2013）では本動詞「来る」の意味・用法とほぼ同様の「同時移動型」は中国語の「V 来」と完全に対応しており、一方、抽象的な移動としての「態度指向型」用法の場合、中国語の「V 来」と対応していないと述べている。

周（2019）では日本語の「てくる」と中国語の「V 来」との対照研究を踏まえ、「てくる」構文の特徴及び「V 来」以外の翻訳タイプを考慮に入れ、日中対訳コーパスから抽出した事例に基づいて、「てくる」の空間移動用法を「往復的継起移動」、「同時移動」と「移動の方向づけ」に分け、「てくる」の逆行態用法を「話者への物の移動」と「話者に向けられた行為」に分け、「てくる」における日中対訳関係及び特徴を考察している。その結果、まず、「往復的継起移動」において、日本語の「てくる」が中国語の「去 + (場所) + 動詞句」に訳されることが多いと指摘されている。また、「同時移動」と「移動の方向づけ」においては「てくる」構文で「着点と方向」が明示されているかどうかにより、日本語の「てくる」と中国語の「V 来」との対応関係が異なってくることを指摘している。具体的には、着点と方向が明示されていない場合は、明示されている場合よりも、日本語の「てくる」が中国語の「V 来」に訳されやすい傾向がある。さらに、「話者への物の移動」においては、被動者が明示されない場合、日本語の「てくる」は中国語の「V 来」に訳されやすく、明示される場合、日本語の「てくる」は中国語の「V 来」に訳されにくいと指摘している。一方、「話者に向けられた行為」においては、被動者が明示されるかどうかに関わらず、日本語の「てくる」は中国語の「V 来」に訳されにくいと述べている。このように、逆行態用法、すなわち、低位の人称が高位の人称に物をあげたり、授与したり、行為が行われたりする場合、日本語では逆行態の有標マーカー「てくる」を必ずつける必要があるが、中国語では「来」が付く場合も付かない場合もある。陳（2017）は、「てくる」のアスペクト用法において、日本語の「てくる」が中国語の「V 来」に訳されにくいと指摘している。以上の日中対訳研究から、「てくる」の各用法及び構文の特徴により、日本語の「てくる」は中国語の「V 来」と対訳関係が異なることが分かった。

2-2. 「てくる」の習得研究及び問題点

菅谷 (2002) では、「てくる」を大きく①物理的空間移動、②認知的用法、③時間的用法の3つに分類し、KY コーパスを用いて英語・中国語・韓国語を母語とする日本語学習者の「てくる」の習得状況を分析している。その結果、物理的空間移動が早く習得され、そこから認知的用法、時間的用法に使用が拡張されていく過程が見られたと述べている。一方「母が小包を送ってきた」のような「対象物の移動」は上級・超級になっても全く正用が観察されなかったとも述べている。許・小川 (2016) においても、「対象物の移動」を表す「てくる」の脱落が多く見られたという同じ結果を報告している。堀江 (2009) と周 (2021)⁴ では中間言語コーパスを用いて、「てくる」が現れる可能性のあるタスクでの日本語母語話者と日本語学習者の使用実態を比較した結果、「てくる」が日本語母語話者に使われやすい部分でも、学習者においては「てくる」の脱落が多く観察されている。許・小川 (2016) は、日本語母語話者と日本国内の大学の中級レベルの日本語学習者を対象に、「てくる」の「物理的空間移動」、「対象物の移動」、「時間の経過による状態の変化」に対し、穴埋めの文完成アンケート調査を行なっている。その結果、「てくる」の脱落、またはほかの文法項目との混同による誤用が多く見られている。以上の研究から、学習者の産出する日本語には、「てくる」の脱落などの誤用が多い一方で、日本語能力が向上するに従い、物理的空間移動から認知的用法、時間的用法に使用が拡張されていることが分かった。

以上の習得研究では、自由会話または穴埋めのアンケート調査を行ない、学習者による「てくる」の産出レベルの習得状況を考察している。しかしながら、許・鶴町 (2009) では初級で学んだ文法項目であっても、実際には正しく使えず、定着が遅い文法項目が多く、学習が進んでも、誤用が改善されないことがあると指摘している。同様に、野田 (2001) は、学習者が「分かった」と思っている、実際に使うとおかしな文になってしまうことが多い文法項目もあり、また表面的にはかなり使えるように見えても、きちんとした使い分けが分かっていないことが多い文法項目もあると述べている。そのため、学習者による「てくる」の産出レベルの習得状況のみならず、理解レベルの習得状況を明らかにする必要があると思われる。また、菅谷 (2002)、堀江 (2009)、周 (2021) で自由会話の

使用のため、その中で産出されない用法の「てくる」が未習得のためなのか、習得途中におけるものなのかが明らかにされていない。許・小川（2016）では、穴埋めの文完成アンケート調査を実施しているが、「物理的空間移動」、「対象の移動」、「時間の経過による状態の変化」のみ考察している。さらに、以上の習得研究では、母語の影響の有無と日本語能力による影響の解明が課題として残されている。

そこで、本研究では、「てくる」の用法分類、日中対照研究、習得研究及び問題点を踏まえて、「てくる」の各用法において、学習者がどのように理解しているか、日本語能力及び中国語母語の影響が学習者の理解にどのような影響を与えるかを明らかにするために、まず本研究に適用する「てくる」の分類枠を作成する。

2-3. 本研究における「てくる」の分類枠

中国語を母語とする日本語学習者における「てくる」習得の全容を明らかにするため、本研究では「てくる」の用法分類研究、日中対照研究及び習得研究を踏まえ、本研究に適用する「てくる」の分類枠を作成した（表1を参照）。

表1 本研究における「てくる」の分類枠

住田（2011 など）		澤田（2009 など）	本研究における分類枠	
空間的機能	V+V型:独立動作	継起移動	空間移動用法	継起移動 下位分類 1: 一方的 下位分類 2: 往復的
	Vm-V型:様態/付帯状況を伴う移動	同時移動		同時移動 下位分類 3: 着点 / 方向明示無 下位分類 4: 着点 / 方向明示有
	V-V型:求心的移動	移動の方向づけ	移動の方向づけ	移動の方向づけ 下位分類 5: 着点 / 方向明示無 下位分類 6: 着点 / 方向明示有
空間移動型	V-v (I)型:逆行態	行為の方向づけ	逆行態用法	話者への物の移動 下位分類 7: 被動者明示無 下位分類 8: 被動者明示有
			話者に向けられた行為	下位分類 9: 被動者明示無 下位分類 10: 被動者明示有
アスペクト機能	V-v (A2)型:継続	継続型アスペクト	アスペクト用法	継続型アスペクト 下位分類 11: 継続型アスペクト
	V-v (A1)型:状態/状況変化	変化型アスペクト		変化型アスペクト 下位分類 12: 変化型アスペクト
		非意図的事象の出現	現象 / 事態の発生 / 出現	下位分類 13: 現象 / 事態の発生 / 出現

表1に示したように、住田(2005, 2011)では、「てくる」が表す機能を「空間的機能」と「アスペクト機能」に分けて、「手紙を送ってくる」の「てくる」を逆行態の有標マーカー(ヴォイスの一種)とし「空間的機能」に加えている。澤田(2009, 2016)では、「行為の方向づけ」(あるいは逆行態)を非空間移動型に分類している(表1を参照)。日本語では、低位の人称から高位の人称に行為が行われる場合、逆行態の有標マーカーとしての「てくる」を付けるのが必須である(古賀2008)。それに対し、中国語では、低位の人称から高位の人称に行為が行われる場合、中国語の「来」をつける場合もつけない場合もある(張2013, 周2019)。よって、以上のことを考慮し、表1に示したように本研究は「てくる」の用法を大きく、「主体移動を表す空間移動用法」(以下「空間移動用法」と記入)と「逆行態用法」と「アスペクト用法」の3つに分類した。また、澤田(2008, 2009, 2016)、『基本動詞ハンドブック』などを参考にし、「空間移動用法」を継起移動、同時移動、移動の方向づけ、「逆行態用法」を話者への物の移動、話者に向けられた行為、「アスペクト用法」を継続型アスペクト、変化型アスペクト、現象/事態の出現/発生に分類している。さらに、日本語の「てくる」と中国語の「V来」との対応関係を基にし、「てくる」をさらに下位分類を設定した。具体的には、表1に示した通り、継起移動を「下位分類1:一方的」と「下位分類2:往復的」、同時移動を「下位分類3:着点/方向明示無」と「下位分類4:着点/方向明示有」、移動の方向づけを「下位分類5:着点/方向明示無」と「下位分類6:着点/方向明示有」、話者への物の移動を「下位分類7:被動者明示無」と「下位分類8:被動者明示有」、話者に向けられた行為を「下位分類9:被動者明示無」と「下位分類10:被動者明示有」にさらに細かく分けた。「てくる」の空間移動用法・逆行態用法・アスペクト用法における下位分類と統一するために、継続型アスペクトを下位分類11、変化型アスペクトを下位分類12、現象/事態の発生/出現を下位分類13にした。表1に示した通り、本研究に適用する「てくる」の分類枠である13種類の下位分類をめぐって、「てくる」の問題項目を作成し、テスト調査を実施した。

3. 研究方法

3-1. 調査協力者

本研究では、中国の西北地域と東北地域にある大学で2022年5～6月に日本語を専攻とする学習者154名（2年修了生59名、3年修了生77名、4年修了生18名）に対して、ペーパーによる語彙テスト、文法テスト、及び「てくる」テスト調査を実施した。平均年齢が21歳6ヶ月（標準偏差は8ヶ月）であった。なお、中国の大学で使用されている教科書及び中国の大学に勤めている日本語教師への聞き取り調査により、「てくる」という文法項目のすべての用法は、1年の後期、遅くとも2年の前期までにすでに導入したことを確認した。

3-2. 日本語の語彙知識と文法知識の測定

調査対象者の語彙知識を測定するために、宮岡・玉岡・酒井（2011）によって開発された語彙テストを使用した。このテストは、和語・漢語・外来語・機能語という4つのカテゴリからなり、12問ずつ含まれており、合計48問のテストとして構成されている。例えば、「昨日は給料日だったので、レストランで一番値段が高い料理を（ ）。」という質問に対して、「発表した 発言した 注文した 要請した」から1つ適切な語を選択することが求められている。この問題で、「注文した」が正答である。このように、この語彙テストは、名詞・動詞・形容詞の3つの品詞カテゴリが設けられ、語種（和語・漢語・外来語）と日本語能力試験配当級（国際交流基金2002）が統制されている。本研究における調査対象者154名の語彙テスト（1問1点・48点満点）の最高点は44点、最低点は10点、平均は26.36点、標準偏差は7.11点であった。このテストの信頼性を表すクロンバックの α 係数は0.84で、十分な信頼性が確保された語彙テストであることが確認された。本研究では「てくる」の理解に対する語彙知識の影響を明らかにするために、調査に先立ち、154名の学習者を上位群・中位群・下位群に分けた。23点から29点の学習者58名を中位群、30点から最高点44点の範囲の学習者48名を上位群、22点から最低点10点までの48名を下位群とした。さらに、この上位群・中位群・下位群の間には有意な能力差（得点差）があることを確認するために、対応なしの一元配置分散分析⁵を行った。その結果、グループ

間の主効果が有意であった [$F(2,151)=313.39, p<.001$]。さらに、シェフェの多重比較⁶を行ったところ、それぞれのグループの間には、有意差があった（上位群 > 中位群 > 下位群）。したがって、語彙テストで分けた上位群・中位群・下位群の能力差は確実に存在することが確認できた。

調査対象者の文法知識の測定には、宮岡・玉岡・酒井（2014）の文法テストの改訂版として開発された早川・玉岡（2015）を使用した。この文法テストは、形態素変化・局所依存・構造の複雑性の3つの構造分類から各12問が出題された、合計36問のテストである。例えば、「わたしは彼が腹を立てたのは（ ）。」という質問に対して、「当然だ 当然だと思ふ 当然です 当然ではないでしょうか」から正解を1つ選ぶ。この問題は構造の複雑性の知識を問う問題で、正解は「当然だと思ふ」である。この文法テスト（1問1点・36点満点）の最高点は33点、最低点は5点、平均は18.14点、標準偏差は5.80点であった。このテストの信頼性を表すクロンバックの α 係数は0.79で、十分な信頼性が確保された文法テストであることが確認された。本研究では「てくる」の理解に対する文法知識の影響を明らかにするために、調査に先立ち、154名の学習者を上位群・中位群・下位群に分けた。15点から20点の学習者57名を中位群、21点から最高点33点の範囲の学習者50名を上位群、14点から最低点5点までの47名を下位群とした。この3グループの文法テストの得点を対応なしの一元配置分散分析で比較した結果、グループ間の主効果が有意であった [$F(2,151)=300.65, p<.001$]。シェフェの多重比較の結果、上位群 > 中位群 > 下位群であった。したがって、文法テストで分けた上位群・中位群・下位群の能力差は確実に存在することが確認できた。

3-3. 「てくる」テストの作成

2-3節で述べた「てくる」の分類枠に基づき、例1に示したように、「てくる」テストを作成した。

例1. 友人：元気ないね。何かあったの？

田中：隣の人が「足音がうるさい」と文句を（ ）んだ。

友人：これから気をつけないと、トラブルになるね。

言ってきた 言われた 言った 言ってくれた

まず、(1) 問題項目の形式について、例1のように、対話形式を設けた。「てくる」は聞き手とベースを共有することを表し(山本2001b)、話し手が聞き手に状況を説明したり、勧誘したり、報告したりといった発話で用いられるものが多く、聞き手に働きかけをするような発話行為と結びつきやすい(山本2007)。そのため、「てくる」の問題項目を会話形式とした。(2) 「てくる」の前にくる前接動詞について、コーパス(BCCWJ, CSJ, I-JAS)⁷、日本語教科書⁸、先行研究を参考に選定した。また、前接動詞の難易度は、日本語教育語彙表JEVに基づき旧日本語能力試験出題基準レベル2級以内に統制した(例1. 言う：旧日本語能力試験出題基準レベル4級)。(3) 使われる場面(あるいは意味機能)について、「てくる」の各用法により、使われる場面を設定した。「てくる」の逆行態用法の意味機能について、山本(2001a)は「てくる」は行為の方向性に加え、話者が事態を「移動」に捉える仕方という意味機能の観点から、「相手」「対抗」「立場」の3類に分類している。それと同様に、筒井(2019)は「てくる」の逆行態用法を感情表現として、「不満・愚痴」に分類している。それを踏まえ、例1のように、話者の「不満・愚痴」の気持ちを含め「相手と対抗・対立する立場」を取る場面に絞った。このように、先行研究を参考にし、「てくる」の使われる場面を設定した。(4) 選択肢について、「てくる」における問題項目の4つの選択肢の中に、例1のように「～てくる」(例1：言ってきた)と「本動詞」(例1：言った)との2つの選択肢を必ず設けた。それは、周(2021：204)が述べているように、中国語母語話者は「てくる」が日本語母語話者に使われやすい部分でも、後続の機能語を使わず、例えば「マリが起きた/起きました/起きて」のような「本動詞」タイプを頻繁に使用する傾向があるためである。また、「てくる」の各用法における統語的な特徴や学習者による誤用を参考にし、「てくる」と「本動詞」以外の2つの選択肢を設けた。例1であれば、逆行態用法の意味合いと統語的に類似する「～られる(受身)」(例1：言われた)と「～てくれる(受益)」(例1：言ってくれた)と他の2つの選択肢を設けた。(5) 設問数について、

13種類の「てくる」の下位分類に2問ずつ、合計26問の「てくる」が正答となる問題項目を作成した。154名のテストの信頼性係数は $\alpha = 0.75$ で、信頼性が確保されたテストであることが確認できた。なお、本調査では、「てくる」がターゲットであることを調査協力者に意識させないよう、語彙テストの48問、文法テストの36問、「てくる」テストの26問の他、ダミー問題の30問も加え、合計140問をランダムに並べ、4回に分け、テストを実施した。

4. 分析結果

4-1. 「てくる」テストに見る各用法の習得の違い

「てくる」の各用法の習得の違いを確認するため、まず空間移動用法、逆行態用法、アスペクト用法の平均得点と正答率を算出した(表2を参照)。空間移動用法は49.40% ($M=5.93$)、アスペクト用法は36.26% ($M=2.18$)、逆行態用法は25.41% ($M=2.03$)であった。154名の学習者の「てくる」の3つの用法の正答率について、対応ありの一元配置分散分析を行った。その結果、有意差が見られた [$F(2,306)=46.80, p<.001$]。そこで、ボンフェローニの多重比較を行ったところ、空間移動用法はアスペクト用法と逆行態用法よりも、アスペクト用法は逆行態用法よりも正答率が有意に高かった(空間移動用法>アスペクト用法>逆行態用法)。つまり、154名の学習者の「てくる」テストの正答率から、空間移動用法がアスペクト用法と逆行態用法よりも、アスペクト用法は逆行態用法よりも理解が進んでいることが明らかになった。ただし、「てくる」の各下位分類の平均得点と正答率から、学習が進んでいる空間移動用法にしても、そうでない逆行態用法にしても、同様のアスペクト用法にしても、例外の下位分類もある。例えば、空間移動用法である下位分類2「往復的継起移動」($M=0.46$; 正答率=22.75%)は逆行態用法の下位分類7「被動者明示無の話者への物の移動」($M=1.18$; 正答率=58.77%)よりも低かったことが分かった。またアスペクト用法において、下位分類11「継続型アスペクト」($M=0.49$; 正答率=24.35%)は、下位分類12「変化型アスペクト」($M=0.85$; 正答率=42.53%)と下位分類13「現象/事態の発生/出現」($M=0.84$; 正答率=41.88%)よりも低かった。

4-2. 「てくる」の各用法における語彙知識・文法知識との相関関係

語彙知識・文法知識と「てくる」の各用法の理解との関連を明らかにするために、表2に示したように、語彙テストの得点、文法テストの得点、空間移動用法の得点、逆行態用法の得点、及びアスペクト用法の得点におけるお互いのピアソン積率相関係数⁹を算出し、検討した。

表2 語彙・文法テストと「てくる」各用法の相関・平均・標準偏差・正答率

変数名	満点	1	2	3	4	5
1 語彙テストの得点	48	—				
2 文法テストの得点	36	.739**	—			
3 空間移動用法の得点	12	.649**	.627**	—		
4 逆行態用法の得点	8	.305**	.346**	.481**	—	
5 アスペクト用法の得点	6	.467**	.374**	.461**	.395**	—
平均	26.36	18.14	5.93	2.03	2.18	
標準偏差	7.11	5.80	2.48	1.60	1.41	
正答率	54.92%	50.40%	49.40%	25.41%	36.26%	

注: $n=154$. * $p<.05$ ** $p<.01$ *** $p<.001$

この表2では、語彙知識と文法知識($r=.739, p<.001$)は強い相関があると解釈できる。語彙知識とのピアソン積率相関係数は、空間移動用法が $r=.649(p<.001)$ 、アスペクト用法が $r=.467(p<.001)$ 、逆行態用法が $r=.305(p<.001)$ となっており、いずれも有意であった。語彙知識とのピアソン積率相関係数から、空間移動用法及びアスペクト用法においては、語彙知識と中程度の相関を示したが、逆行態用法においては、語彙知識と弱い相関があると判断できる。文法知識とのピアソン積率相関係数は、空間移動用法が $r=.627(p<.001)$ 、アスペクト用法が $r=.374(p<.001)$ 、逆行態用法が $r=.346(p<.001)$ であり、いずれも有意であった。文法知識とのピアソン積率相関係数から、空間移動用法においては、文法知識と中程度の相関があるが、アスペクト用法及び逆行態用法においては、文法知識と弱い相関を示した。それらに基づいて、まず語彙知識及び文法知識と「てくる」の各用法とのピアソン積率相関係数を比較すると、語彙知識及び文法知識との相関は、空間移動用法がアスペクト用法より、アスペクト用法が逆行態用法より、強

いことが分かった。また「てくる」の各用法と語彙知識及び文法知識とのピアソン積率相関係数を比較すると、空間移動用法において、語彙知識との相関は文法知識より強いことが明らかになった。アスペクト用法においても、語彙知識との相関は文法知識より強い。しかし、逆行態用法においては、文法知識との相関は語彙知識より強いことが分かった。

このように、相関分析は語彙・文法知識と「てくる」の各用法の理解との関連を調べることができる。ただし、語彙と文法知識が学習者の「てくる」の理解にどのような影響があるのか、各用法の理解がどのように進んでいるのか、ピアソン積率相関係数だけでは判断できない。そこで、本研究では語彙と文法知識で分けたそれぞれの上位群・中位群・下位群の3グループを1つの独立変数とし、「てくる」の各用法の得点を従属変数とした対応なしの一元配置分散分析で比較する。

4-3. 「てくる」の各用法における語彙知識・文法知識との関係

4-3-1. 空間移動用法における語彙知識・文法知識との関係

学習者における「てくる」の空間移動用法の理解に日本語の語彙知識と文法知識がどのような影響があるのか、学習者の理解がどの程度進んでいるのかを見るため、語彙と文法知識で分けたそれぞれの上位群・中位群・下位群の得点を対応なしの一元配置分散分析で比較した。その結果を以下の表3に示した。

表3 空間移動用法における上位群・中位群・下位群別の平均の差の検定

熟達度	平均	標準偏差	分散分析の結果	シェフェの多重比較
語彙知識で分けた群	上位	7.88	$F(2,151)=37.30, p<.001$	上位>中位>下位
	中位	5.66		
	下位	4.31		
文法知識で分けた群	上位	7.84	$F(2,151)=40.30, p<.001$	上位>中位>下位
	中位	5.68		
	下位	4.19		

注: >は有意な違いを示す

表3に示したように、空間移動用法において、語彙知識で分けた3グループの

平均得点は、上位群が 7.88 ($SD=1.98$)、中位群が 5.66 ($SD=2.04$)、下位群が 4.31 ($SD=2.12$) であった。この 3 グループの平均得点の差について対応なしの一元配置分散分析を行った。その結果、語彙知識で分けたグループ間の主効果が有意であった [$F(2,151)=37.30, p<.001$]。そこで、シェフェの多重比較を行ったところ、上位群は中位群より、中位群は下位群より、得点有意に高かった (上位群 > 中位群 > 下位群)。次に、同じ手順で、文法知識で分けた上位群 ($M=7.84, SD=2.21$)・中位群 ($M=5.68, SD=1.88$)・下位群 ($M=4.19, SD=1.96$) 3 グループの平均得点を対応なしの一元配置分散分析を行った。その結果、グループ間の主効果が有意であった [$F(2,151)=40.30, p<.001$]。また、シェフェの多重比較を行ったところ、上位群は中位群より、中位群は下位群より、得点有意に高かった (上位群 > 中位群 > 下位群)。以上のことから、「てくる」の空間移動用法において、語彙知識の豊富さで分けた 3 グループ間と、文法知識の豊富さで分けた 3 グループ間のいずれにおいても、上位群は中位群より、中位群は下位群より、学習者の理解が進んでいると考えられる。

4-3-2. アスペクト用法における語彙知識・文法知識との関係

学習者における「てくる」のアスペクト用法の理解に日本語の語彙知識と文法知識がどのような影響があるのか、学習者の理解がどの程度進んでいるのかを見るため、語彙と文法知識で分けたそれぞれの上位群・中位群・下位群の得点を対応なしの一元配置分散分析で比較した。その結果を以下の表 4 に示した。

表 4 アスペクト用法における上位群・中位群・下位群別の平均の差の検定

熟達度		平均	標準偏差	分散分析の結果	シェフェの多重比較
語彙知識で分けた群	上位	3.02	1.44	$F(2,151)=17.68, p<.001$	上位 > 中位 \geq 下位
	中位	2.03	1.35		
	下位	1.50	0.97		
文法知識で分けた群	上位	2.80	1.70	$F(2,151)=8.29, p<.001$	上位 > 中位 \geq 下位
	中位	1.97	1.09		
	下位	1.77	1.18		

注: \geq は有意な違いではない; >は有意な違いを示す

表4に示したように、語彙知識による上位群($M=3.02, SD=1.44$)・中位群($M=2.03, SD=1.35$)・下位群($M=1.50, SD=0.97$)の3グループの得点を対応なしの一元配置分散分析で比較した。その結果、グループ間の主効果は有意であった [$F(2,151)=17.68, p<.001$]。そこで、シェフェの多重比較を行ったところ、中位群と下位群の間には有意差は認められなかったが、上位群は中位群と下位群よりも得点有意に高かった(上位群>中位群 \geq 下位群)。同様に、文法知識で分けた上位群($M=2.80, SD=1.70$)・中位群($M=1.97, SD=1.09$)・下位群($M=1.77, SD=1.18$)の得点を対応なしの一元配置分散分析で比較したところ、グループ間の主効果が有意であった [$F(2,151)=8.29, p<.001$]。そこで、シェフェの多重比較を行ったところ、上位群と中位群、及び上位群と下位群の間には有意差であったが、中位群と下位群の間には有意な違いが見られなかった(上位群>中位群 \geq 下位群)。以上のことから、「てくる」のアスペクト用法において、語彙知識の豊富さで分けた3グループ間と、文法知識の豊富さで分けた3グループ間のいずれにおいても、上位群は中位群と下位群より、学習者の理解が進んでいるが、下位群から中位群にかけては、学習者の理解が進みにくいと言えるだろう。

4-3-3. 逆行態用法における語彙知識・文法知識との関係

学習者における「てくる」の逆行態用法の理解に日本語の語彙知識と文法知識がどのような影響があるのか、学習者の理解がどの程度進んでいるのかを見るため、語彙と文法知識で分けたそれぞれの上位群・中位群・下位群の得点を対応なしの一元配置分散分析で比較した。その結果を以下の表5に示した。

表5 逆行態用法における上位群・中位群・下位群別の平均の差の検定

熟達度	平均	標準偏差	分散分析の結果	シェフェの多重比較
語彙知識で分けた群	上位	2.54	$F(2,151)=4.72, p<.05$	上位 \geq 中位
	中位	2.00		中位 \geq 下位
	下位	1.56		上位>下位
文法知識で分けた群	上位	2.62	$F(2,151)=5.34, p<.01$	上位>中位 \geq 下位
	中位	1.81		
	下位	1.68		

注: \geq は有意な違いではない; >は有意な違いを示す

表5に示したように、語彙知識で分けた上位群($M=2.54, SD=2.00$)・中位群($M=2.00, SD=1.45$)・下位群($M=1.56, SD=1.15$)の3グループの得点を対応なしの一元配置分散分析で比較した。その結果、グループ間の主効果が有意であった [$F(2,151)=4.72, p<.05$]。そこで、シェフェの多重比較を行った結果、上位群と下位群の間には有意な差があった(上位群>下位群)。しかし上位群と中位群、中位群と下位群の間には、有意差が見られなかった。同様に、文法知識で分けた上位群($M=2.62, SD=2.09$)・中位群($M=1.81, SD=1.25$)・下位群($M=1.68, SD=1.20$)3グループの得点について対応なしの一元配置分散分析を行ったところ、グループ間の主効果が有意であった [$F(2,151)=5.34, p<.01$]。そこで、シェフェの多重比較を行った結果、上位群は中位群と下位群より有意に得点が高かったが、中位群と下位群には、有意な違いがなかった(上位群>中位群 \geq 下位群)。以上のことから、「てくる」の逆行態用法において、語彙知識の豊富さで分けた3グループ間では、上位群は下位群より、学習者の理解が進んでいる。文法知識の豊富さで分けた3グループ間では上位群は中位群と下位群より学習者の理解が進んでいる。

5. 総合考察と今後の課題

本研究では154名の中国語を母語とする日本語学習者を対象に、「てくる」テスト、語彙テスト、文法テストの3種類のテストを実施し、学習者における「てくる」の各用法の理解の違い、及び語彙知識と文法知識が学習者の「てくる」の各用法の理解にどのような影響があるのかを検討した。

第1に、「てくる」の各用法及び下位分類の平均得点と正答率を比較し、学習者における「てくる」の各用法の理解の違いを確認した。その結果、空間移動用法はアスペクト用法より、アスペクト用法は逆行態用法より、理解が進みややすい傾向があることが明らかになった。ただし、理解が進んでいる空間移動用法にせよ、進んでいない逆行態用法にせよ、同様のアスペクト用法にせよ、各用法が示す傾向とは異なる理解度を示す例外の下位分類も観察された。それは各用法及び各下位分類における「てくる」と中国語の「V来」との日中対訳関係の違いに起因すると考えられる。具体的には、空間移動用法における「てくる」と中国語の「V来」との対訳関係はアスペクト用法と逆行態用法より高いことから、一般

的に空間移動用法はアスペクト用法と逆行態用法より理解が進みやすいと考えられる。しかし、逆行態用法の下位分類7「被動者明示無の話者への物の移動」は中国語の「V来」と対応しているため正答率が高く、空間移動用法の下位分類2「往復的継起移動」は中国語の「V来」と対応していないため正答率が低かったと考えられる。

第2に、語彙知識と文法知識が学習者の「てくる」の空間移動用法、逆行態用法、アスペクト用法の理解にどのような影響があるかを2つの観点から検討した。1つには、「てくる」の各用法における語彙知識・文法知識との相関関係を比較すると、「てくる」の各用法が語彙知識・文法知識とは有意な相関関係を示しているが、「てくる」の用法によって、語彙知識と文法知識との相関の強さが異なってくるのが明らかになった。もう1つには、語彙知識と文法知識で分けたそれぞれの上位群・中位群・下位群の3グループの「てくる」の各用法の得点を比較すると、語彙知識と文法知識の豊富さは、「てくる」の各用法の理解に異なって貢献していることが分かった。以上の2つの観点を総合的に考えると、「てくる」の空間移動用法とアスペクト用法と逆行態用法のいずれにおいても、語彙知識と文法知識が豊富になると、学習者による「てくる」の理解が進む傾向が見られる。なお、空間移動用法の理解においては、文法知識より語彙知識がより重要であることが示された。またアスペクト用法の理解にも文法知識より語彙知識の方がより重要であり、かなり日本語の語彙知識・文法知識が豊富にならないと、アスペクト用法の理解が進まない傾向にあることが明らかになった。一方、逆行態用法の「てくる」の理解には、語彙知識より文法知識の豊富さが求められ、かつ、かなり豊富な語彙知識・文法知識がなければ逆行態用法の理解は進まないことが分かった。このように、逆行態用法においては他の用法と異なる傾向が見られるのは住田(2005, 2011)、古賀(2008)、清水(2010)などが指摘しているように、「てくる」の逆行態用法がヴォイス機能を持つユニークな用法であるため、学習者が十分な文法知識を備えないと、十分にこの用法の理解が進まないからだと考えられる。

今後の課題として、まず「てくる」の13種類の下位分類における学習者の習得状況をより詳しく把握するために、「てくる」の各問題を項目分析し、各問題

における困難度、学習者が「てくる」と混同しやすい表現を明らかにしたいと考える。その上で、学習者における「てくる」習得への影響要因を検討していく。

注

- 1 山本 (2007) では「てくる」の<主観性>について、「話し手が事態の出発点あるいは到着点に位置し、事態に直接関与していることを表す指標である。」と指摘している。
- 2 <共同注意>は話し手が聞き手と認知基盤を共有するためのものである (山本 2007)。
- 3 住田 (2011) は「逆向態」と「向」を充てている。しかし、「順行態」との対応関係から考えて、本研究では古賀 (2008)、清水 (2010) にしたがって、「行」を使って「逆行態」とした。
- 4 堀江 (2009) は4コマ漫画を、周 (2021) はI-JAS コーパスを用いて、会話を調査し、日本語母語話者と日本語学習者の「てくる」の使用実態を比較した。
- 5 分散分析とは、3群以上の場合、質的な独立変数に応じ、従属変数の平均がどのように変わるかを検討する手法である。ある独立変数が従属変数に対して影響を与えることを主効果という (張・玉岡 2017)。
- 6 多重比較とは、分散分析で独立変数の主効果が有意になった場合に、3群以上のグループ間の違いを検討するための手法である (張・玉岡 2017)。
- 7 『現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)』『日本語話し言葉コーパス (CSJ)』『多言語母語の日本語学習者横断コーパス (I-JAS)』(50名日本語母語話者の産出データ)における「てくる」のデータを検索し、BCCWJとCSJでの「てくる」の前にくる前接動詞の上位200位、I-JASでの「てくる」の前にくる前接動詞のすべてを抽出し参考にした。
- 8 『みんなの日本語』、『新版中日交流標準日本語』、『新編日語』、『綜合日語』、『新經典日本語』を調査対象とし、「てくる」の用法分類、例文、前にくる前接動詞を調べた。
- 9 ある2つの変数間において、1つの変数の値が変わればもう1つの変数の値もそれに応じて一定量変化する関係を相関関係と呼ぶ。相関分析においては、数値として客観的に関係の強さを示す指標であるピアソン積率相関係数 (Pearson Correlation Coefficient、記号 r) が一般的に使われている (平井 2017)。

参考文献

- 市川保子 (1997) 『日本語誤用例文小辞典』 凡人社
- 今仁生美 (1990) 「V テクルと V テイクについて」 『日本語学』 第9巻5号 pp.54-66
- 古賀裕章 (2008) 『てくる』のヴォイスに関連する機能 森雄一・米山三明・山田進・西村義樹 (編) 『ことばのダイナミズム』 くろしお出版 pp.241-257
- 国際交流基金 (2002) 『日本語能力試験出題基準 [改訂版]』 凡人社
- 坂原茂 (2012) 「アスペクト表示の複合動詞『V て来る』と空間時間メタファ」 『国語と国文学』 第89巻11号 pp.53-62
- 澤田淳 (2008) 『『変化型』アスペクトの『テクル』『テイク』と時間性: タ形『テキタ』と『テittaa』の非対称的な分布に注目して』 『日本語の研究』 第4巻4号 pp.63-69
- 澤田淳 (2009) 「移動動詞『来る』の文法化と方向づけ機能: 『場所ダイクシス』から『心理的ダイクシス』へ」 『語用論研究』 第11号 pp.1-20
- 澤田淳 (2016) 『『行為の方向づけ』の『てくる』の対照言語学的・歴史的研究: 移動動詞から受影マーカーへ』 『言語の主観性: 認知とポライトネスの接点』 くろしお出版 pp.87-110
- 清水啓子 (2010) 「日本語『動詞+てくる』構文の逆行態用法について」 『熊本県立大学文学部紀要』 第16巻 pp.47-75
- 周利 (2019) 『『てくる』構文の日中対訳傾向とその事態把握』 名古屋大学大学院人文学研究科修士論文
- 周利 (2021) 『『てくる』における日中対訳の特徴と中国語を母語とする日本語学習者の使用状況との関係: I-JAS 中間言語コーパスに基づいて』 『日本語・日本文化研究』 第31号 pp.191-205
- 菅谷奈津恵 (2002) 「日本語学習者によるイク・クル、テイク・テクルの習得研究: プロトタイプ理論の観点から」 『言語文化と日本語教育』 第23号 pp.66-79
- 住田哲郎 (2005) 『『てくる』の多義構造とその機能性について』 『国文学研究ノート』 第39号 pp.40-54
- 住田哲郎 (2011) 『移動動詞「来る」の文法化とヴォイス機能』 神戸大学大学院文化学研究科博士論文
- 陳湘奉 (2017) 『『ていく・てくる』と“去・来”の日中対照研究 (研究論文)』 『さいたま言語研究』 第1号 pp.59-72
- 張婧禕・玉岡賀津雄 (2017) 「中国人日本語学習者による NV 型複合名詞の理解」 『小出記念日本語教育研究会論文集』 第25号 pp.35-50
- 張麟声 (2001) 『日本語教育のための誤用分析: 中国語話者の母語干渉 20 例』 スリーエーネットワーク pp.106-121
- 張麟声 (2013) 「再び『V 来, V 去』と『V てくる, V ていく』について」 『日中言語研究

- と日本語教育』第6巻 pp.25-36
- 筒井佐代 (2019) 「感情表現としての補助動詞の考察：V-テクルを例に」『外国語教育のフロンティア』第2巻 pp.127-141
- 中俣尚己 (2015) 「初級文法項目の生産性の可視化：動詞に接続する文法項目の場合」『計量国語学』第29巻8号 pp.275-295
- 野田尚史 (2001) 「文法の理解と運用：『分かった』と『使える』は違う」野田尚史・迫田久美子・渋谷勝己・小林典子『日本語学習者の習得』大修館書店 pp.121-138
- 早川杏子・玉岡賀津雄 (2015) 「改訂版・構造分類による日本語文法知識テストの開発：中国人日本語学習者のデータによるテスト評価」『ことばの科学』第29巻 pp.5-24
- 平井明代 (編著) (2017) 『教育・心理系研究のためのデータ分析入門第2版：理論と実践から学ぶSPSS活用法』東京図書
- 許明子・鶴町佳子 (2009) 「日本語学習者の中級レベル観：中級文法クラスを受講した学生の意識調査を中心に」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』第24号 pp.19-36
- 許明子・小川恭平 (2016) 「中級日本語学習者の移動動詞『行く』『来る』の習得について：学習者の使用状況に関する調査を通して」『国際日本研究』第8巻 pp.277-297
- 堀江裕子 (2009) 「事態把握と〈見え〉の形成：日本語母語話者と日本語学習者を比較して」『人文学部研究論集』第21巻 pp.71-86
- 堀江裕子 (2010) 「話しことばにおける補助動詞の使用実態」『人文学部研究論集』第24巻 pp.99-113
- 宮岡弥生・玉岡賀津雄・酒井弘 (2011) 「日本語彙テストの開発と信頼性：中国語を母語とする日本語学習者のデータによるテスト評価」『広島経済大学研究論集』第34巻1号 pp.1-18
- 森田良行 (1968) 「『行く・来る』の用法」『国語学』第75号 pp.77-87
- 山本裕子 (2001a) 「行為の受け手であることを表す『～てくる』について：『相手』・『対抗』・『立場』」『言葉と文化』第2巻 pp.193-210
- 山本裕子 (2001b) 「聞き手とベースを共有することを表す『～てくる』『～ていく』について」『日本語教育』第110号 pp.52-61
- 山本裕子 (2007) 「〈主観性〉の指標としての『～テイク』『～テクル』」『人文学部研究論集』第17巻 pp.67-81
- 吉川武時 (1976) 「現在日本語動詞のアスペクト研究」金田一春彦 (編)『日本語動詞のアスペクト』 pp.199-228
- 吉成祐子・真野美穂・江口清子・松本曜 (2021) 『移動表現の類型論と第二言語習得：日本語・英語・ハンガリー語学習の多元的比較』くろしお出版

【関連 Web サイト】

基本動詞ハンドブック <http://verbhandbook.ninjal.ac.jp>

国立国語研究所 中納言 <https://chunagon.ninjal.ac.jp/>

日本語教育語彙表 <https://jreadability.net/jev/>

シュウ リ (大阪大学大学院言語文化研究科日本語・日本文化専攻博士後期課程)

**The Influences of Lexical and Grammatical Ability on the
Comprehension of “*tekuru*”:
The Case of Japanese Learners of Chinese as Mother Tongue**

ZHOU Li

This paper examines the differences in understanding of usage of “*tekuru*” and the influences of lexical and grammatical ability on the comprehension of “*tekuru*” by native Chinese speakers learning Japanese. A “*tekuru*” test, a vocabulary test, and a grammar test were administered to 154 Chinese university students majoring in Japanese. First, it compared the mean scores and percentage of correct answers for each usage and subcategory of “*tekuru*” to identify differences in learners’ understanding of each usage of “*tekuru*”. Next, Pearson product-rate correlation coefficients were calculated for each usage of “*tekuru*” with lexical and grammatical knowledge, and their correlations were compared. In addition, we compared the average scores for each usage of “*tekuru*” in the top, middle, and bottom groups for both lexical and grammatical knowledge. As a result, spatial movement usage tends to be easier to understand than aspectual usage, and aspectual usage tends to be easier than inverse usage. However, whether it is the spatial movement usage that is well understood, the inverse usage that is not well understood, or similar usages, some exceptional subcategories show a different level of understanding than the trend exhibited by each usage. In all the three aspects, learners’ understanding of “*tekuru*” tends to improve as their lexical and grammatical knowledge becomes richer. In the spatial shifting usage, learners’ understanding of “*tekuru*” tends to improve as their vocabulary knowledge becomes richer than their grammatical knowledge. In the aspectual usage, learners’ understanding of “*tekuru*” tends to progress only when their lexical knowledge is considerably richer than their grammatical knowledge. Meanwhile, in retrograde usage, learners’ understanding of “*tekuru*” tends to require a considerable enrichment of grammatical knowledge rather than lexical knowledge.

